

～フィリピンの伝統菓子～

Pastillas de Leche 工場を訪ねて

■パステイリヤスというお菓子をご存じでしょうか



パステイリヤスというお菓子をご存じでしょうか。

スーパーの片隅で見かけたことがある方もいらっしゃるかもしれませんが。

パステイリヤスは、フィリピンを代表する伝統菓子のひとつで、水牛のミルクと砂糖を煮詰めて作る、素朴で濃厚なミルク菓子です。スペイン語で「Pastillas」は「小さな丸薬」、「Leche」は「ミルク」を意味し、その名前からもスペイン統治時代の影響を受けたお菓子であることがわかります。

中でも、ブラカン州サン・ミゲル周辺が産地として知られており、今回訪れた工場も同州にありました。マニラからは車でおよそ2時間強の道のりです。

パステリヤスの作り方

製造工程はシンプルですが、作業には忍耐が必要です。

1. 水牛からミルクを搾る
2. ミルクと砂糖を約3時間、焦げ付かないように煮詰める
3. 手でこねる
4. 棒状に成形し、適当な大きさに切る
5. 砂糖をまぶす

■体験してみて感じたこと

水牛の搾乳は想像以上に難しく、最初はなかなかうまくいきませんでした。

お手本では極太のうどんのように勢いよくミルクが出ていたのに対し、実際にやってみると細いそうめんのようにかすかに出る程度。もたもたしているうちに、水牛がいら立っている様子が伝わってきて、少し緊張しました。



煮詰める工程也大仕事です。空調のない作業場に6~7台の大鍋が並び、作り手の方々は大きな木の棒で絶え間なくかき混ぜ続けます。



焦げ付かせないように、やさしく丁寧に混ぜるのがコツです。

出来上がった生地はとても柔らかく、形を整えるのも簡単ではありません。成形するとどうしても不揃いになってしまいましたが、工場の方々は手際よく均等に仕上げており感心しました。



街で売られているものは乾燥タイプで日持ちするものもありますが、工場で作られたパステリヤスは癖のないほんのりとした

甘味のミルク味で、口に入るとフワフワとして生キャラメルのようなとても美味しかったです。

■可愛い包み紙「パバラット」

パステリヤスの魅力のひとつが、外側を包む美しい切り紙です。

これは単なる包装ではなく、「Pabalat（パバラット）」と呼ばれる、フィリピンの伝統的な民芸・装飾文化の一部です。

パバラットの作り方

1. 薄い紙を折りたたむ
2. 鉛筆で下書きをする
3. ハサミのみで細かく切り抜く
4. 広げると、レースのような繊細な模様が現れる

完成した切り紙は、レースのように美しく、使い捨てではもったいないと感じるほど芸術性があります。



■模様と現代的なアレンジ

パバラットの模様には、植物、花、幾何学模様などが多く用いられています。

近年では結婚式の引き出物として使われる際に、新郎新婦の名前を入れるなど、現代的なアレンジも見られるようです。



日本の和紙や切り紙文化にも通じるものがあり、日本人にとっても親しみやすく、魅力的と思ってもらえそうだと思います。

一方で、この繊細な手仕事の技術は、担い手の減少により継承が課題となっているそうです。

■パステリヤスがもつ文化の融合

パバラットの技法は、中国の伝統的な切り紙文化の影響を受けている可能性が指摘されています。

もしそうだとすれば、パステリヤスは、中国の切り紙技法とスペイン由来のミルク菓子文化、フィリピン独自の贈答・手工芸文化が融合して生まれたお菓子と言えるかもしれません。

甘く素朴な味わいの中に、多様な文化の重なりを感じられる。パステリヤスは、そんなフィリピンらしさを象徴するお菓子のひとつだと感じました。ぜひ皆さんも手作りのパステリヤスを味わってみてください。

■ブラカン州サン・ミゲルってこんなところ

ブラカン州サン・ミゲルには、歴史ある古いお屋敷が数多く残っており、街全体に落ち着いた雰囲気が漂っていました。

ブラカン州はかつてサトウキビやお米、牧畜などの農業が盛んであったことや、マニラ近郊の町で交易ルートであったので経済的にも発展し富裕層がバハイ・ナ・バト（石造+木造）を建てました。そして、マニラから離れていた関係で、都市開発が遅れたため、結果として歴史的な建物が集中して残っているそうです。

荒廃しているものも多く今後保存されればいいなと思いました。

紙面ではかつての邸宅の写真を2軒紹介します。

1. テクソン ハウス



もともとの所有者であるテクソン家は、アギナルド元大統領と親交があり、独立革命期にはこの邸宅が拠点として利用されていたそうです。現在は SM グループの一族が管理を行っているとのことでした。

今回、内部を見学させていただきましたが、雨漏りや老朽化も見受けられ、十分な修復や整備が追い付いていない印象を受けました。案内してくださった管理人の方によると、「日本軍が進駐してきた際、アギナルド大統領は隠し階段を使って裏庭へ抜け、その先にある川を下りマニラ湾まで逃れた」との言い伝えがあるそうです。

ただ、日本軍がフィリピンに進攻した時期と、アギナルド大統領が中心的に活動していた時代には隔たりがあり、さらに 50 キロ以上の距離を人目に付かず船で移動したという点を踏まえると、史実としてはやや疑問も残ります。こうした話は、地元につながる伝説の一つなのかもしれません。

それでも、実際に隠し階段を見せていただき、さらに裏手に広がる雄大な川を目の当たりにすると、不思議な説得力とともに、どこか夢のある物語として心に残りました。

2. カタリーノセビリアマンション

1921 年に建てられた市内唯一の 3 階建て。崩れ落ちそうなほどの老朽化が進んでいますが、かつては壮大な邸宅であったことを感じさせます。上はダンスホールであったそうです。主であるカタリーノは貧しい農民でしたが、妻は大地主のデ・レオン家の娘であったそうです。努力の末に町長に上り詰めたのち、妻の父親（義父）を見返したいという野心から、「義父が物理的に自分を見上げ

るように」3階建てを建てた。という逸話があります。

戦争中は日本軍が接収し、使用されていたそうです。



■筆者家族が参加したツアー

Instagram より「**Ripple Wanders**」にアクセス可能です。

ローカルならではの魅力的なツアーが数多く紹介されています。

なお、ツアーの主な使用言語はタガログ語のため、参加の際にはご注意ください。参加者の方が何度か通訳をしてくださるシーンもありました。

■パスティリヤスの工場

今回のツアーで訪れたパスティリヤスの工場をご紹介します。

商品を見かける機会がありましたら、ぜひ一度手に取ってみてください。やさしい甘さで、お子様にも親しみやすい味わいです。

なお、小規模な工場のため、必ず事前連絡の上、ご訪問くださいとのことです。無断での訪問はどうぞ遠慮ください。

